

翻訳への途上

ハイデガー『Sein und Zeit』の翻訳について

岡田悠汰

Martin Heidegger (1889–1976) の *Sein und Zeit* が³ 1927 年に刊行されて以来、現在の日本では刊行途中のものを含めて 11 種類の翻訳書がある¹。これは世界的に見ても稀有なこと²であり、ハイデガーの思索を、翻訳という作業を通して受容することに苦心してきた結果であるといえる。日本の哲学とのかかわりでハイデガーを考えるならば、今までの研究は当然のごとくその思想内容に焦点を当てて行われてきた。他方で、西洋哲学の受容のプロセスにおいて、翻訳という作業は避けては通れないものである。ハイデガーにおいても、それは例外ではない。それどころか、彼が用いる独特な用語の翻訳は現在に至るまで、しばしば日本の研究者を悩ませてきたのである。本論考では、ハイデガーの主要概念に対する訳語から、日本の哲学とハイデガーの関係を見ることで、翻訳という作業における「移り渉り」を描き出す。よって本論考の課題は次の 2 つになる。

1. 寺島実仁訳（三笠書房、全 2 巻、1939、1940）、松尾啓吉訳（勁草書房、全 2 巻、1960、1966）、桑木務訳（岩波文庫、全 3 巻、1960、1961、1963）、細谷貞雄訳（理想社『ハイデッガー選集』第 16・17 巻、1963、1964）、辻村公一訳（河出書房『世界の大思想』第 28 巻、1967）、原佑、渡邊二郎訳（中央公論社、1971）、辻村公一、H・ブフナー訳（創文社『ハイデッガー全集』第 2 巻、1997）、熊野純彦訳（岩波文庫、全 4 巻、2013）、高田珠樹訳（作品社、2013）、中山元訳（光文社、全 8 巻予定、2015～）の 10 種類の翻訳に改訂版（原佑、渡辺二郎訳、中公クラシック、全 3 巻、2003）を含めた数。

2. 例えば論者が確認する限り、英訳は 2 種類、仏訳は 2 種類存在している。

(1) ハイデガーの主要概念に関する訳語の選択という観点から、日本におけるハイデガー哲学の受容の流れを描き出す。その中で、現在使われる多くの訳語³は特に九鬼周造（1888-1941）によって生み出されたという点から、九鬼による訳語がハイデガー哲学の翻訳の土台となっていることを明らかにする。

(2) ハイデガー哲学の受容が始まった当時に行われた翻訳という営みに関する

議論を援用しつつ、日本におけるハイデガーの訳語の議論の果たした役割を検討する。その中で、訳語の議論が、単なるハイデガー哲学の受容の過程ではなく、それぞれの哲学者が自身の思索を展開するための語彙を獲得するという営みでもあったことを示す。

(1) は、第1節と第2節の議論を通して果たされる。第1節では、*Sein und Zeit* 刊行以前のハイデガー受容の状況を、訳語の観点から整理する。その際に田辺元（1885-1962）と三木清（1897-1945）の論文を参照し、ハイデガーの主要概念の訳語の土台がすでに準備されていたことを析出する。第2節においては、*Sein und Zeit* 刊行後の1927年から、寺島実仁（1906-1944）による初めての邦訳『存在と時間』（1939/1940）刊行までの、日本の哲学界における *Sein und Zeit* の訳語（特に *Dasein* と *Existenz*）に関する議論を追跡する。そして九鬼の「ハイデッガーの哲学」（1933）における訳語が、現在の訳語の土台に位置づけられる。

(2) は、第3節と第4節にて扱われる。まず第3節では、第2節の議論を通して明らかとなる、*Dasein* と *Existenz* に関する訳語の対立——「現存在（現実存在）」か「生存」か、「実存」か「自覚存在（覚存）」か——について考察を加える。その際に、訳語が *Sein und Zeit* の読解に与える影響という観点を導入し、九鬼の選択した「現存在」、「実存」という訳語の正当化を試みる。最後に第4節では、佐藤信衛（1905-1989）の哲学用語に関する議論を参照しながら、九鬼を例にとり、単なる訳語を越えた思索の語彙としての訳語の可能性を示唆する。

3. 本論考の「現在の訳語」および「標準的な訳語」という表現は、現在の翻訳で比較的多く使われている訳語、ないし多少の違いはありつつも研究者の間で共有されている訳語のことである。

Sein und Zeit 刊行以前の日本におけるハイデガー受容

日本におけるハイデガー受容は、田辺元の「現象学に於ける新しき転向」(1924)を出発点とする⁴。この論文で、田辺は初めてハイデガーを日本に紹介した。田辺は1922年から1924年までヨーロッパに滞在しており、この論文は帰国後に書かれたものである。田辺によれば、この論文で紹介されているハイデガーの哲学の内容は、フライブルク大学での1923年夏学期講義『オントロジー（事実性の解釈学）』に基づいている⁵。この論文において初めてハイデガーの概念に訳語があてられ、その一部は、Sein und Zeitにおける現在の訳語としても採用されている。例えば、「交渉（umgehen）」、「関心（Sorge）」などである。

Sein und Zeit 刊行以前のハイデガーに関する他の論文としては、三木清の「解釈学的現象学の基礎概念」(1927年1月)がある。この論文は、1922年から3年間ドイツに留学していた三木が、現地で受けたハイデガーの講義の内容をそのまま論文にしていると推測される特殊なものである⁶。しかし、ハイデガーの主要概念の翻訳という観点からは、それでもなお重要な資料である。実際、田辺と共通した「関心」という訳語や、「不安（Angst）」といった訳語が既にこの論文には見られる⁷。

このように、ドイツに留学し現地でハイデガーの講義に参加した研究者たちからの紹介という形で、ハイデガーの哲学の受容が始まったのである。本論考の観点から見ると、それは同時に Sein und Zeit における訳語の萌芽ともいえる。

Sein und Zeit における主要概念の翻訳

前節にて、我々は簡単ながら日本におけるハイデガー哲学の

4. 本論考における参考文献〔ないし引用文献〕のタイトルおよびそこからの引用に際しては、旧字体を全て新字体に改めた。

5. 田辺（1963年）、25。

6. 論者の簡単な調査によると、この論文と、マールブルク大学1923/1924冬学期講義『現象学的研究への入門』の内容及び一部の文章には類似が見られる。しかしハイデガーの名前はこの論文には一切出てこない。

7. 三木（1966年）、210。

受容、そして訳語の萌芽を見たのだが、田辺および三木の論文においては、訳語それ自体が議論の俎上に載せられてはいなかった。しかし、これから見ていくように、Sein und Zeit の刊行以後、ハイデガーの主要概念に対する訳語が、日本の哲学における議論の対象となっていくのである。本節では、その議論を訳語の変遷とともにたどっていく。

さて、Sein und Zeit の翻訳の議論に関して、管見ながら重要に思われるのは Sein、Dasein、Existenz の三語である。現在の標準的な訳語としては、それぞれ「存在」、「現存在」、「実存」があげられている。Sein に関しては辻村公一（1992-2010）が Sein und Zeit を『有と時』（河出書房版および創文社のハイデガー全集版）と翻訳したように、訳語の観点からしばしば議論（あるいは少なくとも関心）の的となってきた。本論考では、それに比べて現在では関心の寄せられることが少ないと思われる Dasein と Existenz の訳語に着目する。というのも本節の議論が明らかにするように、Sein und Zeit 刊行直後の時期において、これら2つの用語が、実のところ訳語に関する議論の中心にあったといえるからである。その議論の要点は、つまるところ先述の訳語の対立——Dasein を「現存在（現実存在）」と訳すか「生存」と訳すか、Existenz を「実存」と訳すか「自覚存在（覚存）」と訳すか——に収斂する。

Sein und Zeit 刊行以後のハイデガーに関する論文として、『哲学雑誌』に掲載された二つの論文、兒玉達童（1893-1962）の「ハイデッガーに於ける二箇の「存在の問題」の関係に就いて」（1929）と、九鬼の「時間の問題 ベルクソンとハイデッガー」（1929）を取り上げるべきである。これら2つの論文は Sein und Zeit の翻訳に関する議論の出発点となる。

兒玉は、Dasein の訳語に関して以下のように述べる。

ダーザインの訳語としては、之を語源の上より考へるか、或は意味の上より考へるか、或は又歴史的訳語に従ふかに依つて種々の言葉が選択されるであらう。若し意味の上よりもすれば生存(者)、人生、有情などが考へられ、又若し語義の上よりもすれば彼在、彼有、訳例に依れば、定在、定有などの言葉がある⁸。

8. 兒玉（1929年）、180。

論者が確認した限りでは、この兒玉の論文が、ハイデガーの用語に對する訳語について言及した初めてのものである。兒玉自身は、この論文で Dasein に対する訳語を確定せず、一貫して「ダーザイン」としている。しかしこの論文において、歴史的訳語、(概念の)意味、語義という3つの観点が導入され、Dasein の訳語の可能性が示されている。特に概念の意味という観点は、第3節で議論する文献解釈と訳語の問題に関係する。このことから、Sein und Zeit がその内容のみならず、訳語に関しても議論の関心事となったといえる。

一方で、九鬼の論文においては、いまだ Sein und Zeit の訳語自体についての議論は表立ってなされていない⁹。しかし、九鬼がこの時期において、Sein und Zeit の用語にどのような訳語をあてていたのかということを知る上では、重要な論文の1つである。例えば、本論考が注目している Dasein および Existenz を九鬼はそれぞれ「現実存在」、「実存」と訳している¹⁰。ちなみに、Sein und Zeit 刊行以前の先述の論文において、田辺も Dasein を「現実存在」と訳していた。2人の間に、訳語に関するやり取りがあったのかはわからないが、九鬼が欧州滞在(1921-1928)の後、京都大学の教授になっていることを考慮すれば、田辺の訳語を借用したという可能性も排除はできないであろう¹¹。他の訳語に関しても少し

9. 他方で、カントの *transzendental* の訳語について、九鬼はこの論文の註の中で興味深い議論をしている(ksz 3: 336 ff.)。九鬼は *transzendental* の訳語として、「先験的」という訳語ではなく、「超越論的」という訳語をあてるべきだということのも九鬼によれば、「先験的」という語は新カント派の学説の色彩が強いからである。訳語と学説は直接的に関係するものであり、それは時代によって変化するものでもある。九鬼の言葉でいえば、「先験的」という訳語は、「既にその歴史的貢献をなし終えた」(ksz 3: 337)のである。このように、九鬼が訳語に関して、その訳語が持つ歴史的役割や学説の解釈に対する影響を考慮して、議論を展開していたことは注目に値する。

10. Vgl. ksz 3: 297.

11. 訳語の借用という観点で、Existenz の訳語に関して補足しておく。この「実存」という訳語は、「時間の問題 ベルクソンとハイデッガー」から九鬼が使ってきたものであった。しかし、この「実存」という言葉を作ったのは九鬼ではなく西谷啓治(1900-1990)である。西谷は1927年にシェリング(Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling)の「人間的自由の本質」(Philosophische Untersuchungen über das Wesen der menschlichen Freiheit, 1809)を翻訳しており、その際に Existenz に対して「実存」という訳語を当てている。なお Dasein に対して「現存在」という訳語を

述べておけば、「会得 (Verstehen)」（現在の訳語では「了解」あるいは「理解」）、「前走的決意性 (vorlaufende Entschlossenheit)」（現在の訳語では「先駆的覚悟性」あるいは「先駆的決意性」など）、「敗類 (Verfallen)」（現在の訳語では「頹落」）といった訳語が当てられている。これらの訳語は、現在の訳語とはまだ異なっている。実際には、以下で見ていくように、九鬼の中でも訳語の変遷がある。そこで我々は、この論文の後に行われた九鬼の講義「Heideggerの現象学的存在論」(1931/1932、以下「ハイデガー講義」と略記)と論文「ハイデッガーの哲学」(1933)を参照して、その変遷を追跡する。その際に、議論の要所となるのはやはり Dasein と Existenz である。

九鬼の「ハイデガー講義」において、初めて Sein und Zeit 全体に訳語が当てられている。その中には、「附託する (Verweisung)」（現在の訳語では、「指示」など）や「帰向存在 (Zuhandenheit)」（現在の訳語では、「手許存在」など）、「時来 (Zeitigung)」といった今では一般的ではない訳語が少なくない。他方で、「配慮 (Besorge)」、「顧慮 (Fürsorge)」、「被投性 (Geworfenheit)」、「投企 (Entwurf)」、「情態性 (Befindlichkeit)」といった、現在でも使われる訳語の多くが登場している。なお、1929年の九鬼の論文における訳語との違いに目を向ければ、「前走的決意性」は「躍進的決意性」に、「敗類」は現在では一般的な「頹落」になっている。このことから、九鬼の訳語の変遷は同時に現在の標準的な訳語の形成過程ともいえる。

さて我々が着目している Dasein と Existenz に関しては、どうなっているのか。「ハイデガー講義」において、九鬼は Sein und Zeit における訳語の議論を初めて展開している。その議論は、Dasein の essentia が Da-

当てていることも見受けられる。戦後に行われた座談会「実存と虚無と頹廃」(和辻 2017, 205-262)において、西谷は Sein、Dasein、Existenz の訳し分けに苦勞した結果、「実存」という語を自ら作ったと証言している (Vgl. ebd., 214)。さらに興味深いことには、西谷は九鬼が「実存」という訳語を借用した可能性を示唆している (Vgl. ebd)。実際に九鬼周造は偶然性という問題関心から、シェリングを評価しており (Vgl. ksz 2: 227ff)、「原始偶然 (Urzufall)」というシェリングの用語を用いていることから、この可能性は大いにありうる。

sein の existentia から把握されねばならないというハイデガーの記述¹²に基づいている。曰く、

故に Dasein といふ名称も、また Dasein の存り方である Existenz という名称も共に本質 (essentia) に対して存在 (existentia) を強調するために特に選ばれた名称なり。さうして Heidegger が Dasein とか Existenz という名称を選んだのは純粹に ontologisch な構造を表はすために選んだのである。Selbstbewusstsein とか Ich とか Subjekt とか Geist とかいふ言葉を特に避けたのである。それ故に〔Existenz に対する〕訳語として自覚的存在などというのは不適切である。Fichte や Hegel の哲学を思出させる限り不適切なり。故に仮りに、

Dasein	現存在
Existenz	実存在

と訳す。Existenz を生存と訳している人もあるが（『朝永博士還暦記念哲学論文集』 p. 259）、生存ではまた他の一方にあまり行き過ぎている。生物学的生理学的存在の観念を与え易い。Heidegger の Dasein や Existenz は Mensch としての存在なり。我々の立場から見て現に存在し、実に存在することである¹³。

引用について付言しておけば、Existenz に関して、九鬼がここで批判している「生存」という訳語は、岡野留次郎（1891-1979）が「存在論的領域としての「超越」について」（1931）において用いたものである。岡野の Existenz 以外の訳語は九鬼の訳語と共通したものが多¹⁴。しかし、zuhanden という語に現在でも多く使われている「手許にある」という訳語を当てている——九鬼は、先述のとおり「帰向存在」という訳語をあてていた——ことは注目に値する。このことから、Sein und Zeit の標準的な訳語が、複数の哲学者によって紡ぎ出されてきたことが示され

12. Vgl. sz: 42.

13. ks. 10: 32f. 下線は九鬼による、亀甲括弧内は引用者による

14. 例えば「現存在」という訳語はもちろんのこと、「前走的決意性」や「関心」、「世界 - 内 - 存在 (In-der-Welt-sein)」など。このこと背景には、岡野が京都帝国大学を卒業し、関西圏で活躍した哲学者であることも関係するかもしれない。

るであろう。

話を九鬼の訳語の議論に戻すと、九鬼がここでの訳語の議論において用いている観点は、先述の兒玉の議論に即せば、歴史的負荷と概念の意味である。すなわち九鬼は、ハイデガーが *Dasein* や *Existenz* という用語を選択した意図をくみ取ったうえで、フィヒテやヘーゲルの哲学を連想させるような、つまり歴史的な負荷がついた訳語を避けるべきであると主張している。このように九鬼は、訳語の歴史的負荷に自覚的になりつつ訳語の選択を行っている¹⁵。また岡野の「生存」という訳語に関しては、ハイデガーの *Dasein* が生物学的内容を包含していないという理由によって批判していることから、概念の内容に鑑みて、訳語を選択しようという意図が見える。このように、概念を翻訳する際には、その概念に関する解釈のみならず、その概念ないし用語が持つ哲学史的な文脈にも向き合わなければならない¹⁶。その点で、概念の翻訳というのは、それ自体で哲学的な議論を含まざるを得なくなってくるのである。

ハイデガー講義の後に書かれた九鬼の論文「ハイデッガーの哲学」からは、訳語の数々の変遷を経た上で、現在の訳語の土台が築かれていったことが分かる。具体的に見れば、*vorlaufende Entschlossenheit* は「躍進的決意性」から「先駆的決意性」、*Zeitigung* は「時来」から「時熟」になっている。この論文において使われる訳語の後世への影響は、辻村が出した *Sein und Zeit* の翻訳『有と時』(河出書房)の凡例の記述からも明らかである。なお、この論文において、*Dasein* と *Existenz* の訳語に関して、ハイデガー講義に引き続き本論考にとって重要な言及が見られる。

15. 本論考の注6もあわせて参照のこと。

16. この点に関しては、和辻哲郎(1889-1960)の訳語の選択基準と異なっている。九鬼はハイデガー講義において、和辻の訳語について言及している(Vgl. *ksz* 10: 48)。九鬼自身は、和辻の訳語に関する見解は述べていないが、その違いは明確である。和辻は *Sein* を「有」と訳すゆえに、*Existenz* を「存在」と訳している。その理由は、先の座談会において述べられている(Vgl. 和辻(2017年)、209f.)。和辻曰く、「実存」という訳語は *Existenz* という語自体が持つ哲学史的背景が見えなくなってしまうために、「存在」と訳すべきであるという。これは *Existenz* が持つ哲学史的な負荷を考慮したうえで、新しい訳語を与えようとした九鬼とは対照的である。

同様に Dasein を「生存」と訳したり、Existenz を「自覚存在」または「覚存」と訳すのも、ハイデッガー哲学の根本傾向に対する感覚において完全とは云えないと思う。Dasein は存在現象的には Da-sein であるから、厳密には「其処存在」などというべきであり、「現存在」と訳したのは既に便宜性への許さるべき譲歩をの上である。「生存」という意識はこの事態を覆い匿して了っている。Existenz も essentia（本質＝可能的存在）と existentia（存在＝現実的存在）との存在学的基礎的分節に根ざしている限りに於て生きている言葉であるから、「実存」と訳すことによって現実的存在との存在現象的系譜が明示されていることが望ましい¹⁷。

この論文においても、Dasein と Existenz の訳語に関する争点として、以下の点が析出される。すなわち、Dasein に適切な訳語は「現存在」か「生存」かということと、Existenz に適切な訳語は「実存」か「自覚存在（覚存）」かということである。この対立点は、今まで見てきた九鬼の言及に鑑みれば、Sein und Zeit の訳語の議論の要であったといえる。そしてこの論点は、寺島実仁による最初の翻訳『存在と時間』を検討するうえでも重要になる。

「現存在」か「生存」か、「実存」か「自覚存在」か

Sein und Zeit の訳語の変遷を追跡することで、ハイデッガーの主要概念の翻訳それ自体が、哲学者の間で議論的となってきたことが明らかとなった。特に九鬼が積極的に議論を展開し、現在の訳語の土台を築いたということは、前節の議論により明白であろう。他方で、九鬼の訳語に関する議論において、Dasein と Existenz の訳語について、1つの大きな争点が見出されたのであった。本節では、この争点に関して、訳語が文献読解に与える影響という観点から、考察する。

Dasein と Existenz の訳語に関してそれぞれ、「現存在」か「生存」か、「実存」か「自覚存在（覚存）」か、という対立があり、九鬼が「現存在」と「実存」という訳語が適切だと考えたことは、すでに繰り返し述べたことである。

17. ksz 3: 265.

しかし、日本で最初に出された *Sein und Zeit* の翻訳である寺島実仁訳『存在と時間』では、*Dasein* を「生存」、*Existenz* を「覚存」と訳されている。この訳語の選択にはどのような背景があるのか。

寺島は訳者の序文において、鬼頭英一（1908-1969）の訳語を多数拝借していると述べており（Vgl. 寺島訳上巻, 4）、解説書としても鬼頭の『ハイデッガーの存在学』（1935）の参照を指示していることから、この翻訳は鬼頭のハイデッガー研究から大きな影響を受けているといえる。実際に鬼頭の解説書を参照すれば、*Dasein* を「生存」と訳し、*Existenz* を「自覚存在」、縮めて「覚存」と訳している¹⁸。鬼頭がこれらの訳語を積極的に選択した理由を、この解説書からうかがい知ることはできない¹⁹。しかし、鬼頭の哲学的関心の一つに「死」の問題があった²⁰ことを考慮すれば、例えば、この「生存」という訳語はハイデッガーの「死」の議論をふまえていたのかもしれない。ところで、「生存」という訳語の提案は、先述の兒玉の論文においても既に見られたものであるので、特に驚くような訳語ではなかったはずである。しかし、前節で見たように、「ハイデッガーの哲学」での議論に基づくならば、「生存」と「自覚存在」という訳語を、ハイデッガーの哲学の内容ないし意図に留意して、九鬼は批判していたのである。このような九鬼の批判は、管見ながら、とても的を射ているように思われる。というのも、「生存」や「自覚存在」といった訳語は、*Sein und Zeit* の誤読を誘発する可能性を孕んだ訳語だからである。

シュールマンは *Sein und Zeit* の戦間期における二つの優勢な誤読を指摘する。すなわち、「実存主義的誤読」と「人間学的誤読」である²¹。「実存主義的誤読」とは、第一次世界大戦後という時代背景の中で、『存在と時間』を当時覆っていた不条理の気分を表現したものとして読解する

18. Vgl. KEC 4: 137.

19. 鬼頭は、*Existenz* に関して、「自覚存在」が一番適切であると述べているが、理由は書いていない（Vgl. KEC 4, 138）。しかし、後に「実存」という語が一般化している状況から、「実存」を使うようになっている。

20. 『鬼頭英一著作集第1巻 哲学思索の論理』所収の編集解説（245-291頁）参照

21. Vgl. シュールマン（2017年）、92。

ことである。サルトルはこのような読解のもとに、ハイデガーの「死」の議論や「不安」を取り上げて「人間の実存の存在論」を展開したとシュールマンは指摘する。「人間学的誤読」とは、『存在と時間』を人間学として読解する誤読である。実際、ハイデガーは *Sein und Zeit* においておこなった *Dasein* の分析を、人間学とは区別している²²。我々が *Sein und Zeit* を読解する時に、何よりも重要なのは、ハイデガーは「存在そのもの」に焦点を合わせているのであって、決して「*Dasein*（ましてや人間）の存在」ではない。

このことに注意するならば、「生存」および「自覚存在」といった訳語はこれらの誤読を誘発してしまうのではないだろうか。すなわち、「生存」という訳語は、*Sein und Zeit* における「死」の議論への注目の偏りを誘発し、また人間学的ないし生物学的な分析をしているような印象を与えてしまう。「自覚存在」という訳語もまた、「自覚」という言葉ゆえにハイデガーの意図とは異なった誤読を誘発しうる。実際に鬼頭は、「死」という関心を持って *Sein und Zeit* に取り組み、ハイデガーの哲学を実存哲学と考えていた²³。従って、鬼頭もまたシュールマンが指摘するような誤読に陥っているのではないかと考えることができる。そして寺島実仁訳『存在と時間』も鬼頭の誤読の延長線上にあるといえよう。このことから、訳語を選択する際の基準として、可能な限り誤読を誘発しないように努めることが明らかとなる。そのため、「生存」、「自覚存在」といった訳語は *Sein und Zeit* における訳語として不適切なものと言って良い。この基準に照らしてみると、九鬼の訳語の方が適切だといえる。

単なる訳語を越えて

以上、*Sein und Zeit* の訳語という観点からハイデガーと日本の哲学との関係を見てきた。その中で明らかとなったのは、翻訳に苦勞を要するハイデガーの用語に対する日本の哲学者たちの試行錯誤であり、*Sein und Zeit* という書物をめぐる解釈の議論が、その訳語の議論に反映

22. Vgl. sz § 10.

23. Vgl. ksz 4: 276.

されていることであった。

本節では最後に翻訳という営みと思索の関係について簡単な考察を加え、訳語が単なる訳語としてではなく、思索の語彙として役割を果たすということを示唆しよう。Sein und Zeit の訳語が議論されていた当時、哲学用語の翻訳についてどのような議論がなされていたのか。佐藤信衛は「哲学の用語について」(1932)において、哲学用語に日本語としての不備があるという。佐藤によれば、翻訳された哲学用語も結局は日本語を離れてしまったものであり、原語のコンテクストから離れることはできない²⁴。そうして訳語として書かれた言葉となった哲学用語は意味や、内容、文脈を離れた空虚な言葉になる危険性がある。我々の思索は何かのを伴うのであり、この象は風土や民族が反映される。だから我々の思索は我々の言葉でなければならないという²⁵。そこで哲学用語を単なる訳語としてではなく、それ自体一つの言葉として活かさなければならないと主張する²⁶。つまり、哲学用語を、外国語の訳語、借り物の言葉としてではなく、我々自身の思索を行うための言葉として、活用されねばならないのである。そのために必要なことは、まず自分で思索して意味を作ってから、言葉を選択することである²⁷。

九鬼は Sein und Zeit の訳語を、その訳語としての役割を越えて、自らの思索の語彙として用いていた。例えば、「哲学とは存在一般の根源的会得であると私は考えている。哲学とは存在の会得である」²⁸と九鬼は言い、かの有名な論考『「いき」の構造』(1930)においては「意味体験としての「いき」の理解は、具体的な、事実的な、特殊な「存在会得」でなくてはならない」²⁹と主張する。ここで Seinsverständnis に対する「存在会得」という訳語は九鬼に特有のものであるが、彼はこの訳語を単にハイデガーの用語ではなく、もはや彼の独自の思索を表現展開するための語彙として使っているのである。事実として九鬼が佐藤の論文を読ん

24. Vgl. 佐藤 (1932年)、54。

25. Vgl. ebd., 55.

26. Vgl. ebd., 60.

27. Vgl. ebd.

28. Ksz 3: 106.

29. Ksz 1: 13.

でいたのかは定かではないが、九鬼の哲学の中では、ハイデガーの用語が訳語を越えて活用されていたのである。このように九鬼においては、ハイデガーの訳語の議論は単なるハイデガー哲学の受容の過程にとどまることなく、自らの思索を展開する語彙の獲得の過程でもあったのである。それは訳語が借り物の言葉を越えて、自分の言葉になる過程でもあったのである。

結

以上をもって、最初に提示した本論考の目的は達せられた。本論考は、主眼を歴史的な議論に置いたので、このように獲得された語彙が具体的にどのように九鬼の思索と関係するのかについては機会を改めて論じなければならないであろう。しかし本論考を通して、*Sein und Zeit* の訳語をめぐる議論に日本の哲学者たちの間の、そしてハイデガーと日本の哲学者たちの間の「移り渉り」を描くことはできたであろう。

参考文献

略記

- KEC 『鬼頭英一著作集』、公論社、1988
 KSZ 『九鬼周造全集』、岩波書店、1980
 SZ Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, 19. Aufl. (Tübingen: Max Niemeyer) 2006.

Sein und Zeit の翻訳

- 1939 寺島実仁訳『存在と時間』、三笠書房、全2巻、1939, 1940
 1960 松尾啓吉訳『存在と時間』、勁草書房、全2巻、1960, 1966
 1960 桑木務訳『存在と時間』、岩波文庫、全3巻、1960, 1961, 1963
 1963 細谷貞雄訳『存在と時間』、理想社『ハイデッガー選集』第16・17巻、1963, 1964
 1967 辻村公一訳『有と時』、河出書房『世界の大思想』第28巻
 1971 原佑、渡邊二郎訳『存在と時間』、中央公論社
 1997 辻村公一、H・ブフナー訳『有と時』、創文社『ハイデッガー全集』第2巻
 2003 原佑、渡辺二郎訳『存在と時間』、中公クラシック、全3巻

- 2013 熊野純彦訳『存在と時間』、岩波文庫、全4巻
 2013 高田珠樹訳『存在と時間』、作品社
 2015 中山元訳『存在と時間』、光文社、全8巻予定

その他

HEIDEGGER, Martin

- 1994 Gesamtausgabe, Bd. 17, *Einführung in die phänomenologische Forschung*
 (Frankfurt a. M.: Vittorio Klostermann).

シェリング

- 1951 『人間的自由の本質』、西谷啓二訳、岩波文庫

和辻哲郎

- 2017 『初稿 倫理学』、荻部直編、ちくま学芸文庫

嶺秀樹

- 2002 『ハイデッガーと日本の哲学』、ミネルヴァ書房

菅原潤

- 2018 『京都学派』、講談社現代新書

田辺元

- 1963 『田辺元全集第4巻』、筑摩書房

三木清

- 1966 『三木清全集第3巻』、岩波書店

シュールマン

- 2017 「ハイデッガーの『存在と時間』」、S・クリッチリー、R・シュールマン『ハイ
 デッガー『存在と時間』を読む』、S・レヴィン編、串田純一訳、法
 政大学出版局、2017所収92-235頁

兒玉達童

- 1929 「ハイデッガーに於ける二箇の「存在の問題」の關係に就いて」、『哲
 学雑誌』、有斐閣、1929年3月号所収175-208頁

岡野留次郎

- 1931 「存在論的領域としての「超越」について」、天野貞祐編『朝永博士
 還暦記念論文集』、岩波書店、1931所収213-263頁

佐藤信衛

- 1933 「哲学の用語について」、『思想』、岩波書店、1933年2月号所収
 50-67頁

